

# 北西関東における弥生後期の 遺跡動態と環境変動

Archaeological Site Dynamics and Environmental Changes  
in the Late Yayoi Period in the Northwestern Kanto Region

若狭 徹

WAKASA Toru

はじめに

- ①埼玉県妻沼低地の弥生遺跡の展開と消失
- ②群馬県榛名山東南麓地域における弥生時代の集落展開
- ③南関東北部の弥生後期
- ④古墳前期の低地開発
- ⑤移入集団の故地と環境変動
- ⑥弥生～古墳時代の社会再編と環境変動

おわりに

## 【論文要旨】

利根川の上流域に位置する北西関東地方では、弥生時代中期中葉以降、利根川沿岸低地に規模の大きい農耕集落が展開した。しかし、それらは弥生時代後期前半に一斉に解体し、集団は台地上で分散的に暮らすようになる。これは、弥生中期末に発生した多雨化による低湿地環境の悪化にあったと推定される。集団の分散や大規模水田経営の途絶により、首長層の成長も遅れたと考えられる。

その後、弥生時代後期終末になると遺跡は再び低湿地に進出し、より広大な水田経営を行うようになった。多雨化の収束による環境改善があったと推定される。この時期に低地に新出したのは、先の環境変動によって流動化した東海地方の集団であり、濃尾平野の低地で培ってきたソフトウェアを投入することにより、利根川沿岸低地の広域的な水田化が進行していった。

やがて古墳時代前期になると、首長の墓として前方後方墳が複数築造された。当地域の前方後方墳は東海地方起源の墓制であるが、大型のものは本貫地の東海地方よりも北西関東に多い。このことは、集団移住の規模が大きかったことと、その集団が首長によって組織化されたものであったことを示している。弥生時代末には、北陸地域や房総地域の集団の北進も発生している。こうした広域的な社会再編は、環境変動による土地利用の激変と集団の流動化が原因であり、それが古墳時代の新たなシステムの形成を促したものと考えられる。

【キーワード】 多雨化、集落再編、 集団移動、 低湿地開発、 前方後方墳

## はじめに

本共同研究は、環境的基盤と戦争との関係性を検討するものであるが、ここではその主旨に則り、関東地方における環境変動と古代社会の動態の一例について取り上げていきたい。対象とする時期は弥生時代後期から古墳時代前期、フィールドは関東地方内陸部の埼玉県地域と群馬県地域である。本稿では対象地域を北西関東と呼んでいきたい（図1）。

この地域には、基幹河川として利根川が流れている。利根川は、群馬県の北部山岳に発し、関東平野を流れ下って房総半島の銚子市で太平洋に注ぐが、これは近世の利根川東遷事業の結果であり、本稿が対象とする古代においては東京湾に注いでいた。中流部においては、群馬県と埼玉県の県境を流れ、地形学の成果によると当時は大きく乱流し、多数の支流を形成したことが知られる。また、秩父盆地から流れる荒川とは流路を近接させており、古墳時代のある段階までは利根川が荒川や元荒川の流路と接続していたと推定される。

利根川と荒川が近接する一帯は、「妻沼低地」とよばれる低地帯となっており、その南には現在の荒川と利根川の間を画する大宮台地が存在する。こうした地理環境のもと、一帯には河川交通が縦横に発達し、東京湾と内陸部を結んでいた。大宮台地の北縁部には、「万葉集」東歌に詠まれた「埼玉の津」が推定され、内陸部への水運の結節点を形成していたことは疑いない。

近年、妻沼低地周辺の弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡の動向が明らかとなってきた。また、そこから利根川を遡上した群馬県側にも低湿地が広がるが、ここには古墳時代初頭に東海系外来土器の大規模な移入が知られている。これまで、個別に検討されてきた両地域だが、本稿では総合的に遺跡の動向を追跡し、その歴史的意義と環境変動との関係について小考していきたい。

## ①……………埼玉県妻沼低地の弥生遺跡の展開と消失

### （1）妻沼低地の弥生中期

北西関東における弥生時代前期の遺跡は、再埋葬を特徴とする埋葬遺跡が多く知られているが、居住遺跡の事例は極めて少ない。住居の型式が竪穴ではなく、平地式であった可能性も考えられるが、日ごろは小集団が分散的に展開し、集団結合を示すために共同して再埋葬による円形原理の墓域を営む社会様態が推測されている〔設楽 2008〕。

再埋葬遺跡は、台地上に立地する例や、群馬県吾妻町岩櫃山遺跡などのように、山間の岩陰に営まれる例が著名であった。しかし、群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡を契機にして低地部に立地する遺跡も見られはじめ、近年では利根川中流域の妻沼低地に、同様の立地をとる遺跡が多く知られるようになった。妻沼低地北部域には西側の丘陵から櫛引台地が伸びているが、その縁辺ならびに台地下部の低地には弥生前期末から中期にかけて熊谷市横間栗遺跡や飯塚南遺跡、上敷免遺跡などの再埋葬遺跡が形成された。

櫛引台地とその南方の江南台地・比企丘陵の間には、秩父盆地に発した荒川が東流し、平野部に

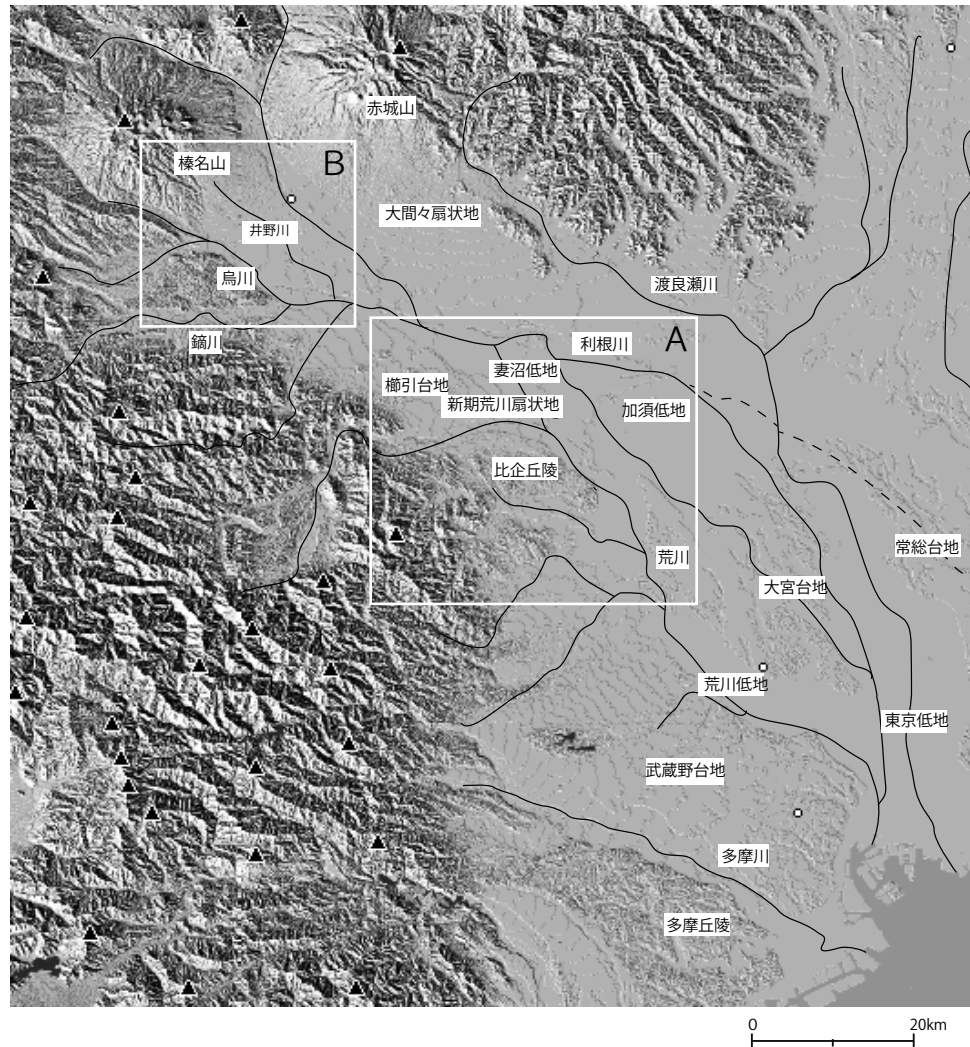


図 1 北西関東の地理と検討対象地域

(カシミール 3D を用いて作成。大河川流路は古代の想定流路)

流れ出した地点には堆積作用によって「新期荒川扇状地」が形成され、利根川に向かって張り出している（図 1）。その端部から、湧水を起源とした小河川群（星川・忍川など）が、妻沼低地南部を流れ、複雑な微高地を形成している。やや遅れた弥生中期中頃になると、このエリアの微高地上に大規模な集落遺跡が展開を始める。北関東で最古の環濠集落として知られる池上遺跡、その一連の遺跡でやはり北関東最古の方形周溝墓を検出した小敷田遺跡などである（図 2）。

熊谷市池上・小敷田遺跡は、蛇行する小河川を挟んで立地しており、その水利を利用した農耕集落であることが明らかである。調査範囲だけでも南北 500 m 以上の広がりを持ち、中期中葉に開始している。堅穴建物跡 28 軒や土坑 150 基が検出されたほか、直線的な溝があり、環濠集落と推定される。また、北西関東地方では最古の方形周溝墓が溝を共有して 3 基並んで築造された〔埼玉県教育委員会 1984・1991〕。本遺跡は、この一帯で最初の本格的な農耕集落と評価される。

池上・小敷田遺跡の土器群は、壺や甕に縄文や変形工字文・刺突文などを施文する池上式（図 3）を主体としつつも、北陸の小松式、南東北の南御山Ⅱ式、中部高地の栗林Ⅰ式の搬入が知られる。

河川交通を利用した幅広い文化交流があったことが明らかであり、このころの利根川低地帯は弥生文化が交接する回廊として機能していたことが窺える。

中期後半になると熊谷市北島遺跡が成立し、池上式が様式変容した北島式土器が成立する〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2003・吉田 2003〕。また栗林式も一定比率で存在する〔石川 2007〕。北島遺跡では80軒に及ぶ竪穴建物跡や1棟の掘立柱建物、多数の土壙のほか、自然河川ならびにそこから分水をはかった合掌型の堰（合掌型に杭と粗朶を組み合わせ、その上に土留めを行った堰）が検出された。さらに水路の先には小区画水田が検出された。北西関東では現段階で最古の水田遺構であり、本格的な水田農耕の採用が実証された（図4）。

熊谷市前中西遺跡は、北西関東最大級の弥生集落遺跡で、直径700mの範囲から多数の竪穴建物跡や方形周溝墓の検出が知られている（図2）。弥生中期中葉（池上期）に成立したが、中期後半（北島期）から後期初頭（岩鼻期）に最盛期を迎え、突如終焉する〔関東弥生文化研究会他 2013〕。本遺跡では、北島式の後半期に栗林式（中部高地型櫛描文）の影響が強くなり、後期にはそれが在地変容した岩鼻式が成立する。本遺跡の発見によって、埼玉県北部における中部高地型櫛描文系土器様式（岩鼻式）の成立過程が明確化された。また、本遺跡には大宮台地以南の南関東に展開した宮ノ台式の搬入もみられる。<sup>（註1）</sup>

前中西遺跡では、墓制においても方形周溝墓に加えて、中部高地固有の礫床木棺墓が採用されており、一定規模の中部高地系外来集団がこの地に到来したと考えられる。この時期には中部高地で遺跡の大規模化（人口増加）が知られており、同時に群馬県西部地域や妻沼低地に栗林式系土器の拡散が発生する。このことは、連動した動きと捉えられる。

## （2）埼玉県北部における弥生後期の展開

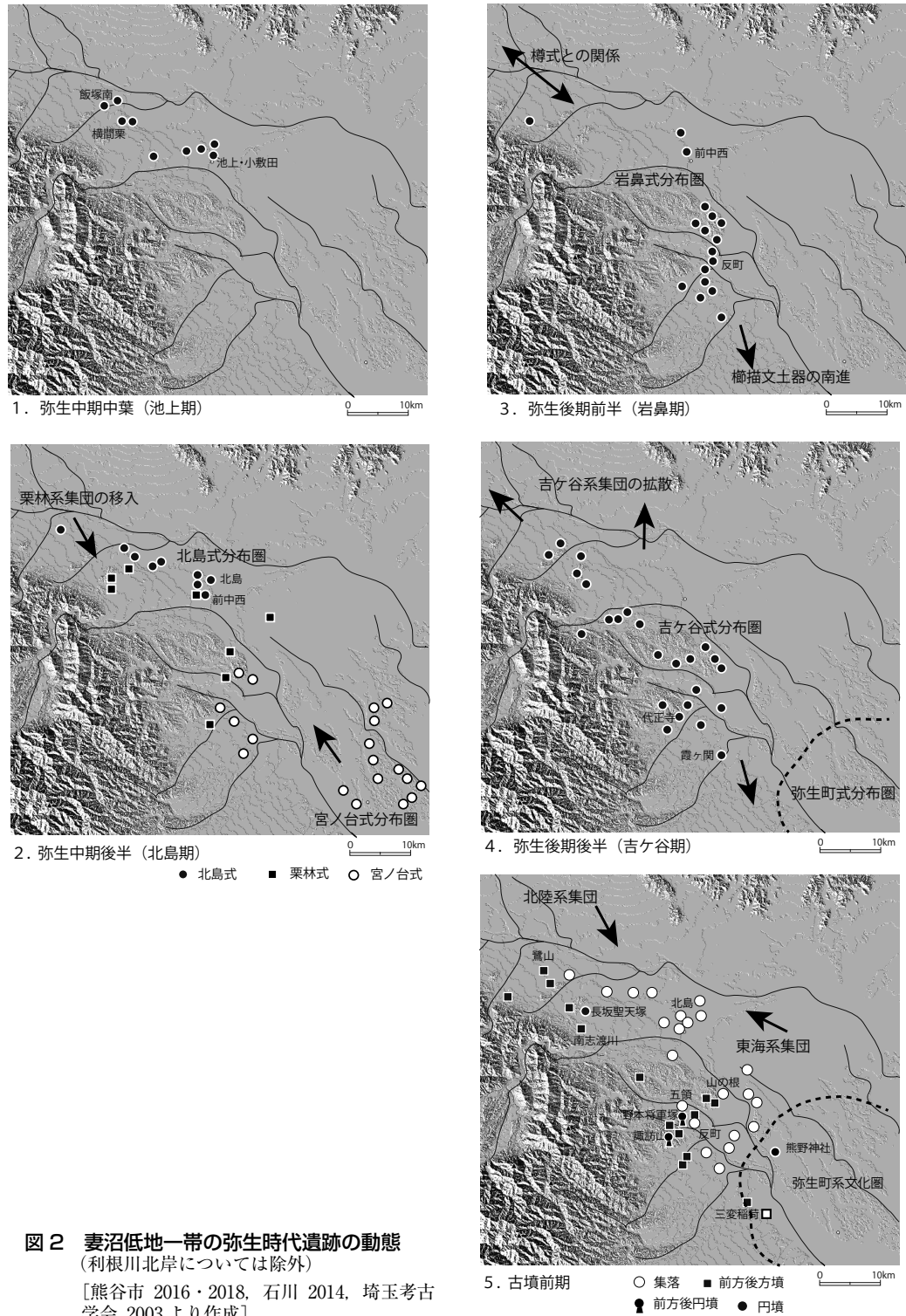
弥生中期に大規模化した妻沼低地の集落であったが、後期前半にはいと一転して遺跡数が激減する。多くの遺跡では、古墳時代前期まで土地利用が停止してしまうのである。

そして、この時期以降の遺跡は妻沼低地から離脱して、東松山市一帯の比企丘陵に移動することが知られる〔図2、柿沼 2018〕。そこで用いられる土器は、上述した栗林式の流れを汲んだ中部高地型櫛描文土器の地域的小様式で「岩鼻式」と称される。

西隣の群馬県西部地域にも中期後半から栗林式が定着しており、後期には同地域の地域的小様式の「樽式」が定立する。本貫地の中部高地では、栗林式から吉田式を経て「箱清水式」に発展しており、箱清水式、樽式、岩鼻式が同調し、中部高地から北西関東にまで及ぶ広範な中部高地型櫛描文土器様式圏を形成した。ただし、これまでのところ岩鼻式の大規模集落は形成されておらず、小規模集落が点在する状況である。

比企丘陵を中心とした台地上では、後期中頃にいたると「吉ヶ谷式」が成立する（図3）。壺・甕の形態は岩鼻式を引き継ぎつつも、櫛描文を捨て去り、粗大な単節縄文を壺・甕ともに施文するものである〔柿沼 2008〕。後述するが、このころ武蔵野台地から大宮台地に展開していた弥生町式土器（壺に帯縄文を施文）との影響関係が考慮される。

吉ヶ谷式土器をもつ集団は、比企地域の台地上に展開していた岩鼻式のエリアを踏襲するが、後期後半から終末になると比企地域を基盤としながらも、北・西・南方に拡散する。北と西の移動先



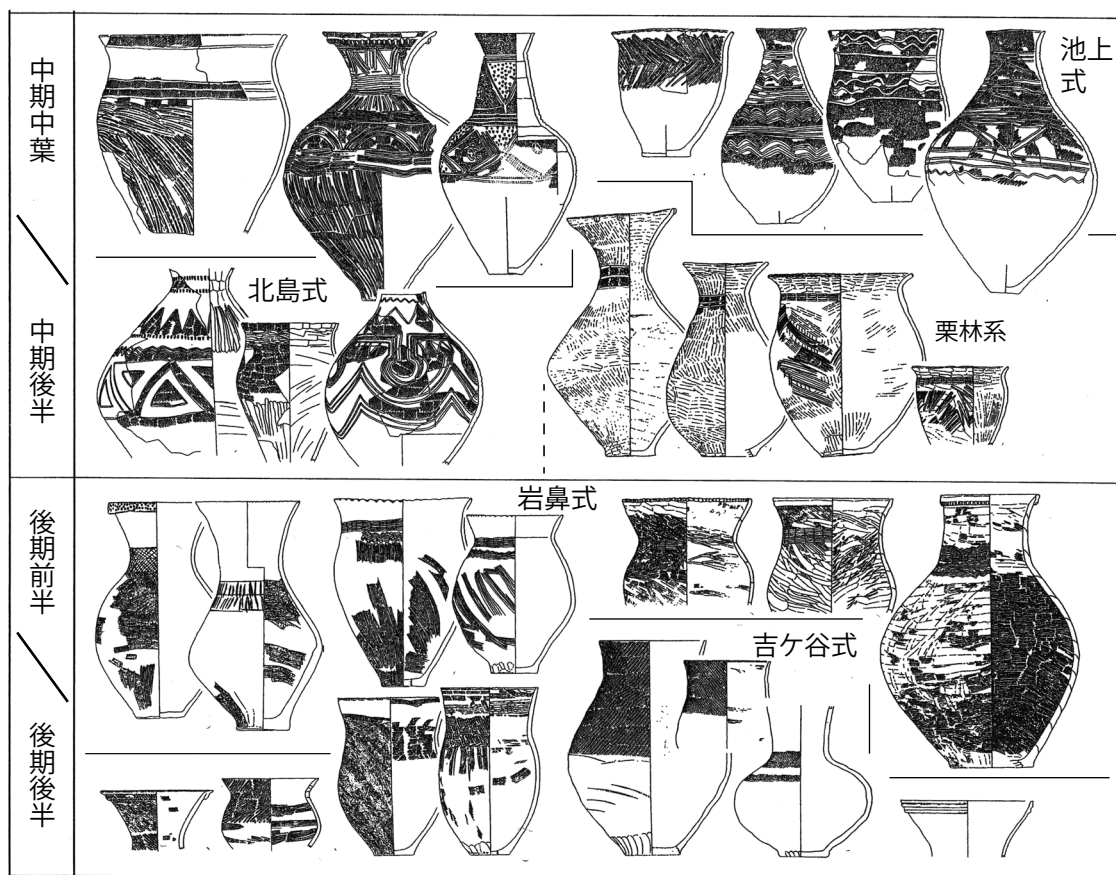


図 3 埼玉県北部における弥生土器編年  
[熊谷市 2018 を筆者改変]

は、群馬県西南部の鎭川流域下流，群馬県東部の赤城山南麓地域，栃木県西部の渡良瀬川流域である。鎭川下流域では樽式から吉ヶ谷式に転換し，上流域では樽式が存続する〔若狭 1990〕。比企地域において，岩鼻式から吉ヶ谷式に推移した流れが，やや遅れて鎭川下流域で進行した形である。赤城山南麓や渡良瀬川流域は，弥生後期遺跡がほとんどない地域であったが，古墳時代を目前にして吉ヶ谷集団が拡散した。また，武蔵野丘陵を縦断して南にも土器の移動がみられるのである。

## ②……………群馬県榛名山東南麓地域における弥生時代の集落展開

### (1) 榛名山東南麓の地勢と弥生中期の状況

群馬県地域は，県央部を流れる利根川によって東西に分かれる。西部地域（西毛）の要には榛名山がそびえ，その東南麓部に律令期の国府や国分寺が造営されたように，一貫して古代上野国の政治的中心となる。その端緒は弥生時代中期後半に開かれる。

榛名山東南麓には，約 2 万前の山体崩落によって広大な相馬ヶ原扇状地が形成されている。その

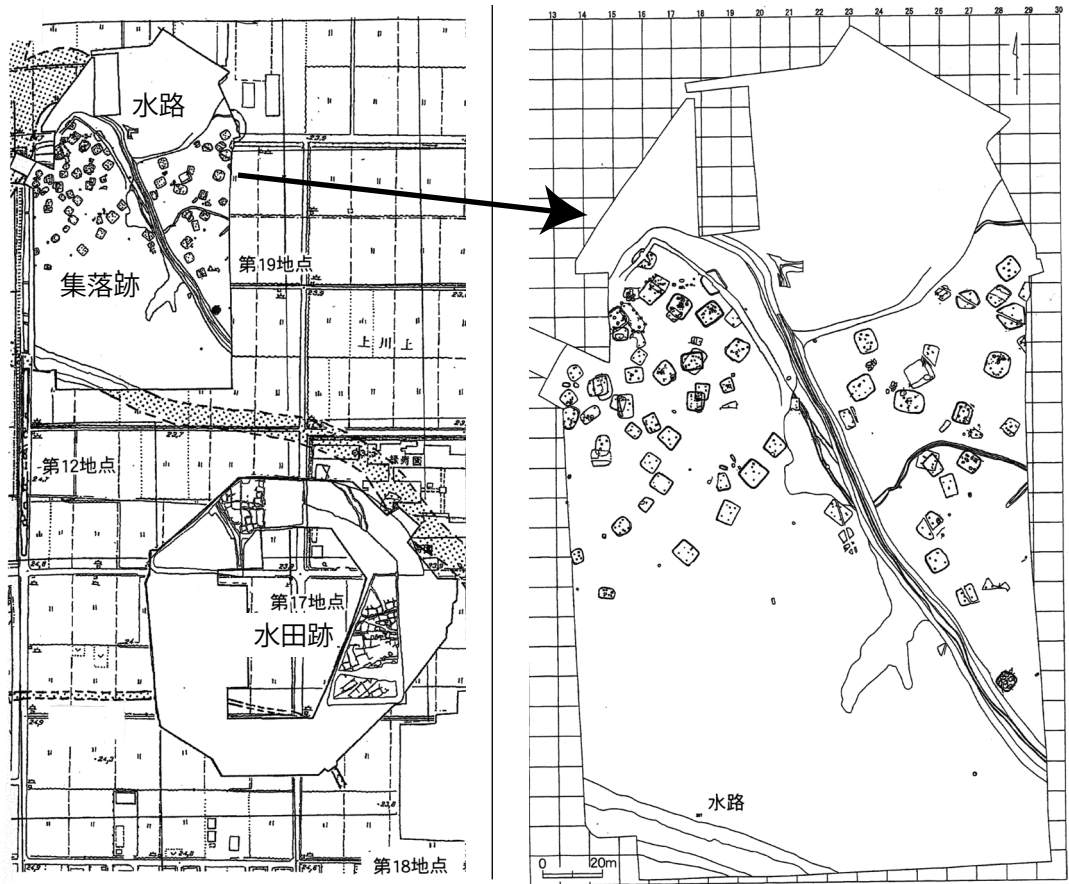


図4 北島遺跡の中期後半の集落と水田跡

[埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004]

扇端部には多数の湧水地が存在し、流れ出た小河川群がその先に低湿地を形成している。低湿地帯は、榛名山の山体部の東側を流下する旧利根川流路（中世における現利根川への遷移以前の幅3kmに及ぶ流路跡が残る）と南側の烏川に挟まれた南北15km、東西10kmの範囲に広がっている。

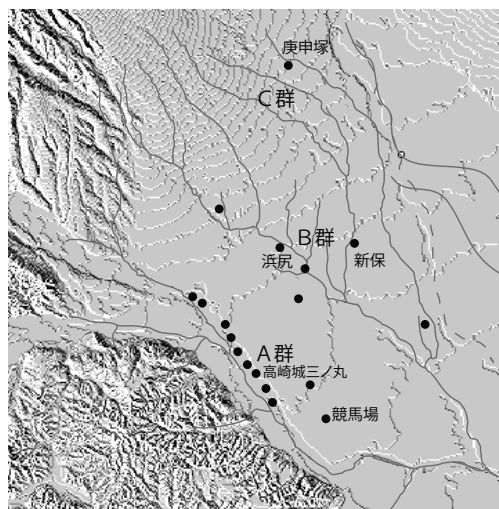
縄文時代から弥生時代中期中葉までの遺跡は扇状地上には乏しく、その周辺の台地や段丘上に存在していた。相馬ヶ原扇状地とその一帯に遺跡が多く出現するのは、弥生中期後半の中部高地栗林集団の進出以降である。

当該地域の遺跡動態はかつて論じたことがあるが[若狭 2007]、近年の動向を踏まえて再論しておきたい。

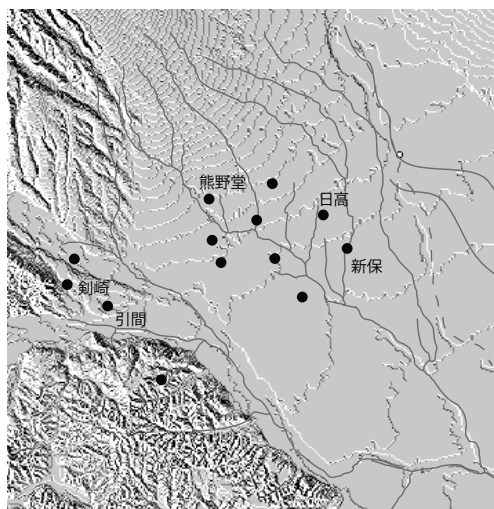
まず中期後半の栗林期における遺跡の分布域は大きく3つに分かれる（図5、図6）。

A群は、烏川東岸沿岸の自然堤防上やその東方の後背湿地の中にある微高地上に展開した遺跡群である。高崎城三ノ丸遺跡、高崎競馬場遺跡、上並榎南遺跡など、環濠を巡らした拠点集落が多く営まれる。

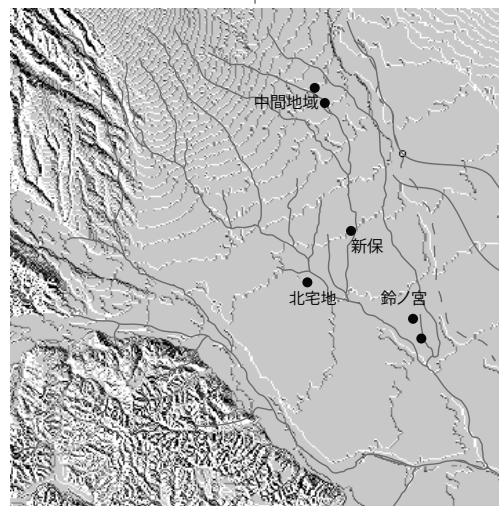
B群は扇状地中央部から流れる井野川沿岸の遺跡群で、新保遺跡・浜尻遺跡などの大型集落が知られている（浜尻遺跡は環濠をもつ）。ただし扇状地端部から流れた小河川群は、井野川の下流部



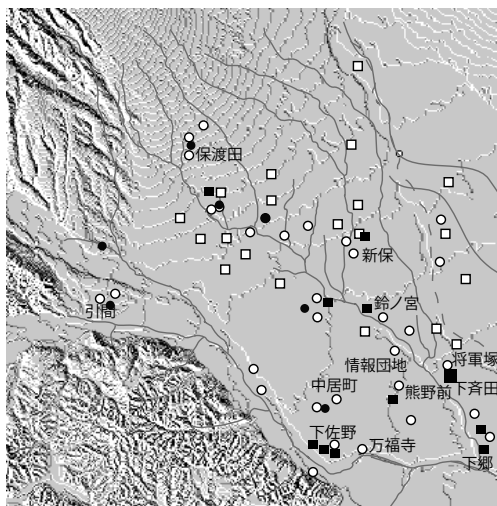
1. 弥生中期後半 (栗林期)



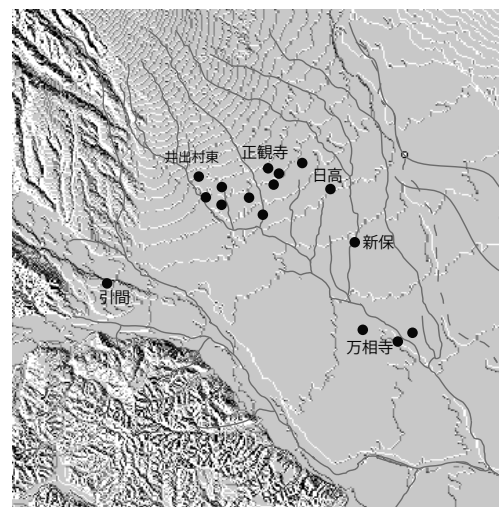
4. 弥生後期後半 (樽 3 期)



2. 弥生後期初頭 (樽 1 期)



5. 古墳時代前期前半



3. 弥生後期前半 (樽 2 期)

図 5 榛名山東南麓における集落動態



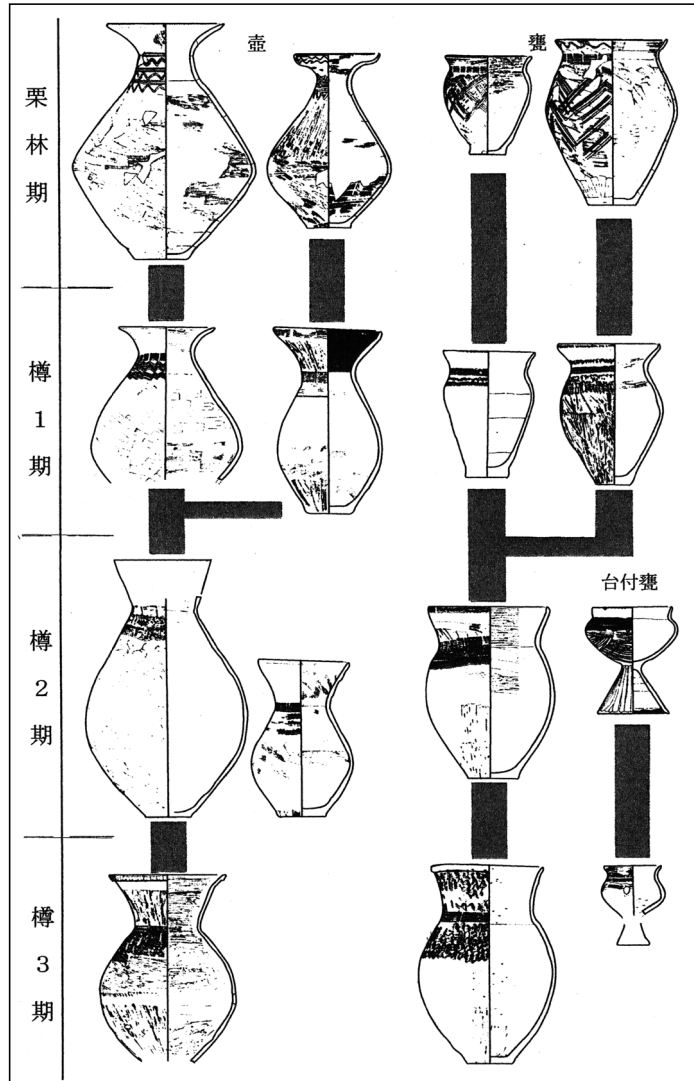


図6 榛名山東南麓における弥生中期後半から後期の編年  
[若狭 2007]

広大な低湿地を形成しており、ここには弥生集団の進出は後期を通じて認められない。

C群は、扇状地東端部において中期末に出現したもので清里庚申塚遺跡（環濠集落）などが知られる（図7）。

A・B群においては、環濠集落を核にして周辺に小集落が展開する形態をとり、中期後半（栗林Ⅱ式期）には一定量の遺跡が出現する。栗林Ⅰ式期の遺跡がほとんど見られないので、栗林Ⅱ式期に中部高地から大量の集団移入があったことが想定できる。C群の遺跡の資料は栗林Ⅱ式でも新しい段階であることから、B群から分かれて拠点を形成したムラであろう。

群馬県西部地域では、榛名山東南麓以外でも栗林集団の進出が顕著であり、その流れは妻沼低地における前中西遺跡の大規模化などとも連動的である。榛名山東南麓の3つの群のなかでも優勢なのはA群で、高崎城三ノ丸遺跡では環濠の中央に大型の方形周溝墓を営んでいる。

## （2）弥生後期における集落途絶と移動

しかし、後期（樽1期）になると大型遺跡や環濠集落は解体する。B・C群では環濠集落が解体するとともに、その周辺に小集落が分散する。それまで優勢であったA群では、環濠集落はことごとく終焉すると同時に、一帯の遺跡の存在自体がほぼ皆無となる。A群は烏川東岸の後背湿地を背景に成立していたが、後期初頭に何らかの環境変動があり、農業経営ならびに集落維持が困難になったことが見て取れる。A群の一帯には中規模河川が無く、湧水にほぼ依存する地形である。現在でもこの地域は湧水が豊富であるが、弥生後期に至っての経営放棄は、湧水の枯渇によって水田に用水供給が行えなくなったか、湧水の過剰によって排水系統が構築できず、水浸しの状況となっ

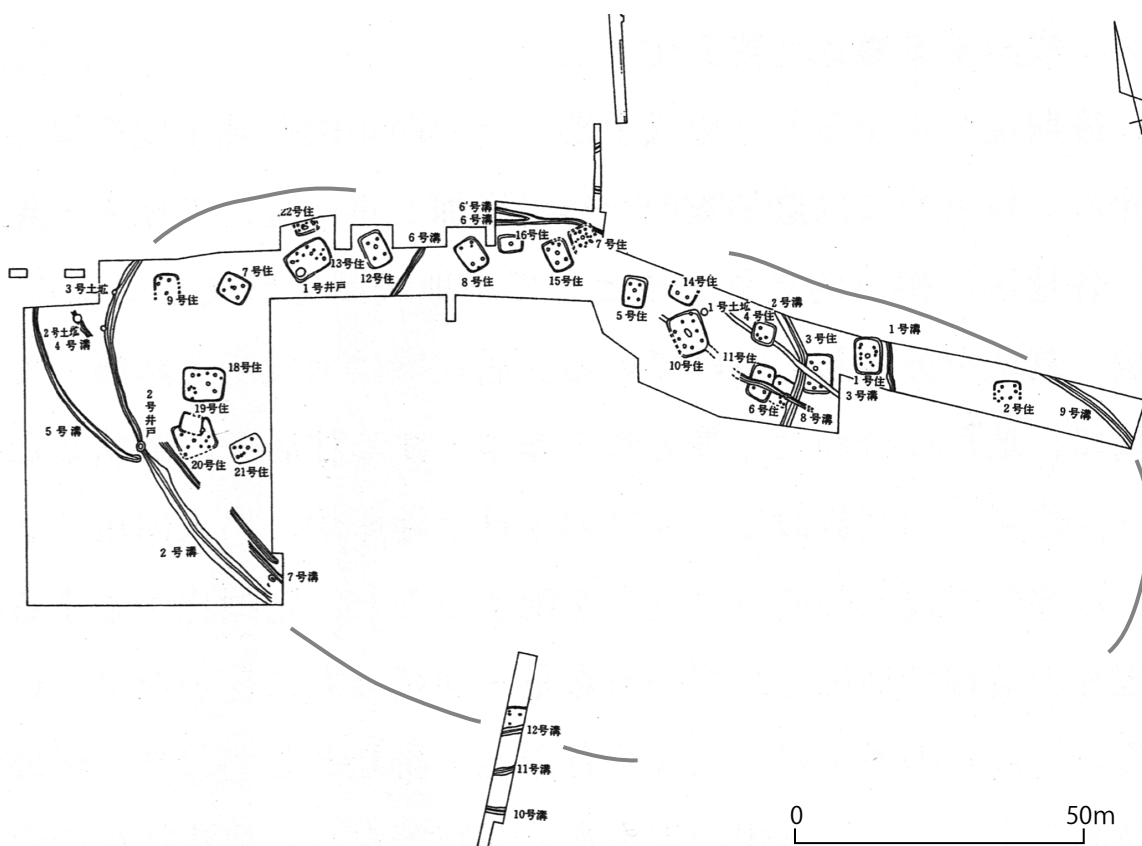


図7 榛名山東南麓の弥生中期後半の環濠集落（清里庚申塚遺跡）

〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982〕

たかのいずれかと思われる。これについては後者と考えているが、その理由は後述する。いずれにしても、優勢だったA群エリアでは古墳時代初頭段階まで遺跡が途絶する。

つづいて後期中葉（樽2期）になると、B群で集落数が増加するが、相馬ヶ原扇状地端部の標高100～120m前後ラインに遺跡が多くなり、高崎市日高遺跡のように、湧水起源の谷底平野において水田経営を行う中小規模の集落が扇状地端部に併列的に立地する。環濠集落は認められない。同時期には相馬ヶ原扇状地周辺の台地上に集落が展開する。

後期後葉（樽3期）になると、分散して併存していた遺跡が整理され、再び拠点化する動きをみせる。遺跡はB群に集中しており、新保遺跡・新保田中村前遺跡などが拠点化し、規模の大きな墓域（方形周溝墓と円形周溝墓）も形成される。環濠集落が再び出現するのもこの時期の特徴である。

相馬ヶ原扇状地以外に目を向けると、群馬県北部の渋川市域（有馬遺跡など）、北部の山間盆地にある沼田市域（日影平遺跡など）、南西部の富岡市から甘楽町の鎭川流域（南蛇井増光寺遺跡など）にも後期後半の大型集落が目覚ましく発達する。また、鎭川の下流域では吉ヶ谷集団の移入もあって集団が流動化する。鎭川上流域では比較的比高差のある尾根上に中高瀬観音山遺跡などの大型集落が発達する。また、この時期には群馬県北西部の全域で家屋の焼失が目立っており、環濠集落の再出現と併せ、地域社会に緊張関係が生まれたことが推定される。

### ③……………南関東北部の弥生後期

#### (1) 東京湾西岸の弥生後期

北西関東の状況を鮮明化するために、南関東の状況も瞥見しておきたい。南関東では、弥生中期後半に宮ノ台式土器が東京湾西岸地域（埼玉・東京・神奈川県）と対岸の内房地域（千葉県）にまたがって展開した。拠点的な環濠集落が小型集落を伴って高密度で分布し、ひじょうに安定的な様相を示した。

後期初頭になると後続様式である久ヶ原式（幾何学的な帯縄文装飾を行う壺とナデ整形の甕を基本組成とする）に推移するが、一転して集落は激減することが知られている（図8）。また、中期後半に北西関東に及んだ中部高地型櫛描様式の伸張力は南関東にも及び、後期の多摩丘陵には朝光寺原式が成立した。朝光寺原式は、沿岸部の久ヶ原式と並存した。

そうしたなか、相模湾岸の神奈川県域でも後期初頭に遺跡集落が激減する状況が指摘されており[伊丹他 2002]、その空白地に東海地方の土器様式を保持した集団が移入する。このうち神奈川県中央部の相模川流域では、東海西部の山中式系（三河の寄道式・西遠江の伊場式）の系譜を引く集団が、また、相模平野西部の金目川流域には東海東部（東遠江の菊川式・駿河の雌鹿塚式）の系譜を引く集団が移入したことが判明している[立花実 2005]。

同じ頃、東京湾西岸の武蔵野台地にも、東海東部系土器を保持する遺跡が出現する。なかでも菊川式土器の影響は強く、後期後半には菊川式をベースにして在地久ヶ原式が混交した様式が、荒川下流の両岸流域（武蔵野台地・大宮台地）に成立した。これが弥生町式である。

このように、弥生後期の南関東は、外来集団の影響をうけ、東海東部の影響が強い相模湾沿岸地域と荒川下流域[南武蔵北部様式, 古屋 2014]、宮ノ台式後継の久ヶ原式が展開する多摩川下流域[南武蔵南部様式, 古屋 2014]に地域色が分れていった。

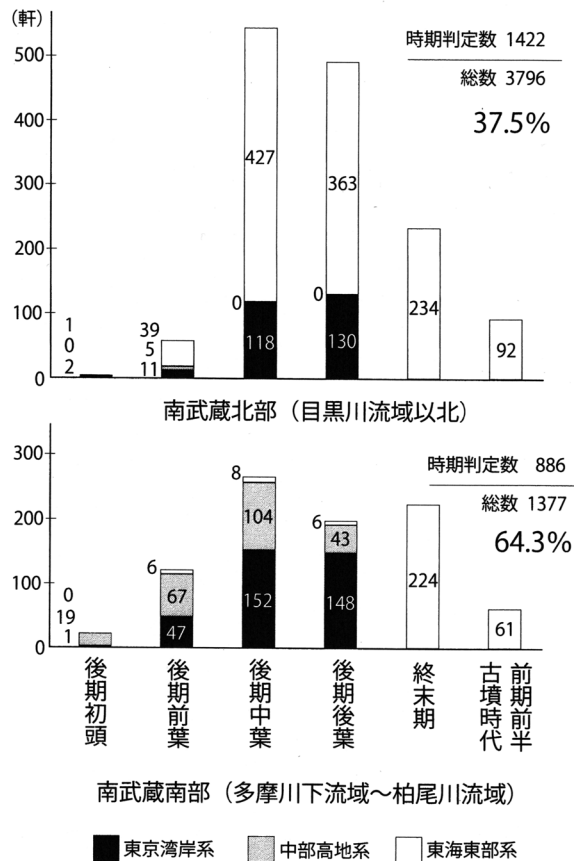
#### (2) 荒川両岸地域の動向

本稿で対象としている北西関東に接続するのは荒川下流域である。ここでは、おもに大宮台地上に宮ノ台式期の集落が点在した。しかし、台地の両側に広がる荒川低地・加須低地・東京低地の弥生前半期の様相が不明である。

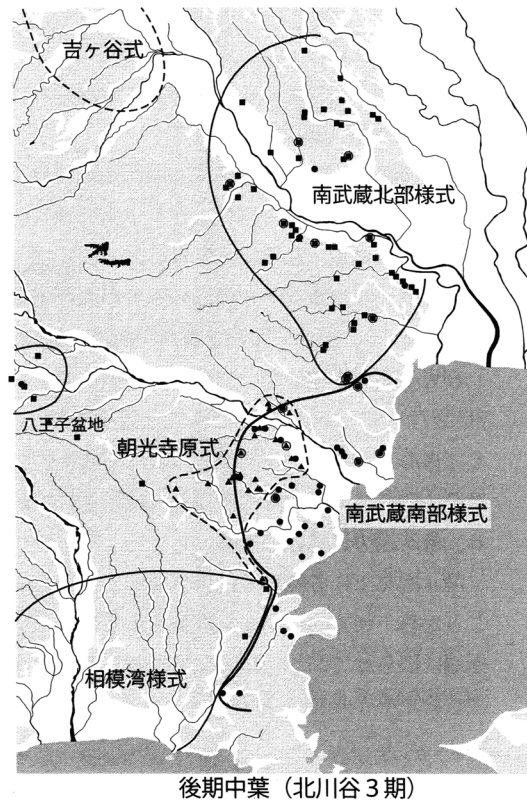
ここでは、神奈川県地域と同様に宮ノ台式期のあとに空白期がみられるが、台地上では後期中葉から弥生町式（東海東部系）の分布圏が拡大しはじめ、後期後半になると南は目黒川流域、北は大宮台地の南半部まで集落が展開していく。古屋紀之の統計作業によれば（図8）、この一帯では、①後期初頭に住居件数が3軒だったのものが、②後期中葉に545軒、③同後半に493軒、④終末に234件、⑤古墳前期前半に92軒と推移しており、後期中葉以降、驚くべき進展を遂げたことが判明する。また土器の系譜はいずれの段階でも東海東部系の要素が8割以上を占めている[古屋 2014]。

なお、上述のように、南方の多摩川流域では在来の久ヶ原式の要素が顕著で、東海系要素は乏し

### 1. 南武蔵弥生後期の住居数の推移



### 2. 後期中葉の様式圏



### 3. 後期中葉の南武蔵北部の土器様式 (弥生町式)

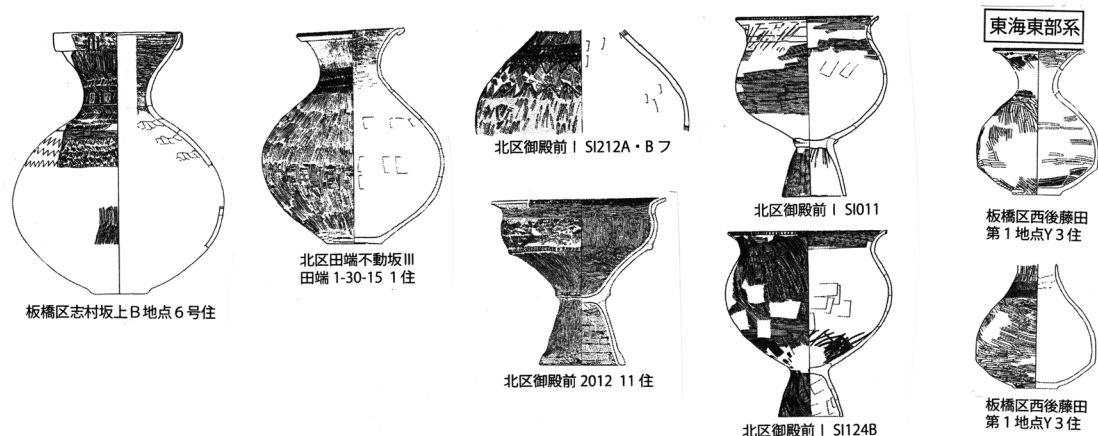


図8 南武蔵における弥生後期の様式圏と住居数の推移  
[古屋 2014 を改変して作成]

いが、後期終末になると一気に東海東部系に転じるとされる。さらに南に位置する相模湾沿岸は東海東部系の影響が強いため、荒川下流域の集団は、本貫地との情報交流を保っていた可能性が高い。これが後の古墳時代への伏線となる。従来は、S字甕を保持した東海西部集団の展開ばかりが注目されてきたが、それに先立つ、あるいは連動した東海東部集団の動向に改めて注目しなくてはならない。

なお、太平洋岸と中部高地（さらに北の日本海側）を接続する利根川・荒川回廊の役割は、弥生中期中葉から北陸地方と南東北地方を繋ぐ形で顕在化したが、中期後半から後期初頭になると妻沼低地からさらに南に文化的影響力を延伸した。中部高地系櫛描文土器の南進である。

しかし、そのルートは、利根川下流域の加須低地や大宮台地東岸経由ではなく、遺跡の分布からは荒川下流域、しかも西岸の武蔵野丘陵東縁に顕著であった。このルートの南端にあたる東京都下では、古くから中部高地型櫛描文土器の出土が知られ、中部高地に分布が偏在する螺旋状鉄釧が将来し、方形周溝墓などから出土している。中部高地系集団は、利根川・荒川回廊を通じて日本海側の文物を南に流す役割を持っていたことが推測されるのである〔若狭 2007〕。一方、南関東に主体的に見られる小銅鐸や銅環などは、東海系集団の祭祀体系に根差したものといえよう。

## ④……………古墳前期の低地開発

### (1) 北西関東における弥生集団の展開動向

以上触れてきた、北西関東の榛名山東南麓ならびに妻沼低地周辺、荒川下流域の3地域の遺跡群動向をまとめてみると、

- ①弥生中期中葉から、妻沼低地に集団が進出し、本格的な農耕集落を営むとともに東西交流が活発化する。
- ②中期後半から中部高地系集団（栗林式）が群馬県西部地域と妻沼低地一帯に移入する。妻沼低地では在地の池上式が変容して北島式が成立し、本格的な水田を営んで低湿地経営を展開する。  
栗林集団の関東地域への移入は、南関東における宮ノ台式の集落が高密度で展開する事象と連動的である。南関東では人口増による集団の大規模化、中部高地では地域を超えるほどの人口増加が起きたことが推測される。
- ③弥生後期初頭には拠点となった環濠集落や大規模集落が解体し、集落の減少や分布域の組み換えが関東全域で発生した。南関東では特に人口減少が著しく、この時に東海集団の移入が促進される。以後、東京湾西岸では東海東部集団の影響が顕著な状況が続く。
- ④後期前半から中葉の北西関東のうち、埼玉県北部では、集団は低湿地から比企丘陵などの台地上に移動する。群馬県西部でも低湿地の集落は消失し、相馬ヶ原扇状地端部の微高地や周辺の丘陵部へ集落が移動する。また県域北部の山間盆地へも集落が展開していく。

低湿地における水田経営から撤退によって、水稻農耕に畑作を組み合わせた農業に転換したことが、レプリカ法による栽培植物の検討から確認できる〔柿沼 2018〕。後述するように、ここには環境変動の影響を想定すべきである。

⑤後期後半には、荒川下流両岸に東海東部系土器が在地化した弥生町式が展開し、遺跡が激増する。群馬県西部でも樽式を保持する遺跡が増加するとともに、分散的だった集落が大型化し、環濠集落が再び出現する。比企丘陵では櫛描文系から縄文施文の吉ヶ谷式に変化するが、南武蔵からの集落拡大に伴って、吉ヶ谷集団の一部は群馬県西南部や赤城山南麓、栃木県西部などに拡散する。

北西関東の遺跡群は、このような連動的な動きを見せるのである。

## (2) 低湿地への集団回帰

北西関東の集団は、弥生後期初頭に低湿地農業経営から一度離脱した。一方、大宮台地（武蔵南部）に展開した弥生集団は当初より低地に集落を営むことは稀で、一貫して台地上に選地していた。台地の眼下に位置する東京低地には弥生時代の集落はほとんど確認できないのである。

北西関東で低湿地に遺跡が再び展開するのが、古墳時代前期である（図2・5）。妻沼低地では弥生中期の遺跡の上層をトレースして、古墳前期の遺構が重複する。池上・小敷田遺跡、北島遺跡、前中西遺跡などで古墳前期の大規模な集落が確認できる。なかでも北島遺跡では、方形の溝で区画された環濠中に住居群が営まれる（図9）。そのほかにも、同地域では新規の遺跡が出現しており、低湿地経営に新しいソフトウェアが投入され、後期に廃絶された低湿地は、ここで再び広大な農耕地帯に回帰したのである。

榛名山東南麓のA群域でも、古墳前期に低湿地に遺跡が再出現し、高崎市中居町遺跡群のように遺構密度の濃い集落遺跡が形成された。中居町1丁目遺跡では弥生町式系の加飾壺を供献した大型の方形周溝墓が営まれ、南関東系を含む集団が移入したことが明らかである〔若狭 2018〕。

## (3) 低湿地への遺跡の新出

古墳前期には、上述のような低湿地経営の再興とともに、かつて弥生時代遺跡が無かったエリアに人々が新出する現象も顕著である。

まず荒川下流域では、それまで空閑地であった東京低地や荒川低地に大規模な遺跡が出現する。東京低地では東京都葛飾区御殿山遺跡、足立区伊興遺跡・舎人遺跡（以上、現荒川左岸中川・毛長川流域）、台東区駒形遺跡・北区豊島馬場遺跡（以上、現荒川右岸）などが挙げられる。御殿山遺跡では東海西部・東部（大廓式）、北陸、近江、畿内、下総、北西関東系など多系統の土器がみられ、海上交通と内水交通の結節点であったとみられる。伊興遺跡は5世紀に韓式系陶質土器が出土するような交通拠点となるが、その先駆的な津が存在したのであろう。このエリアでは東海西部系S字甕の比率が高いことが知られており、同じくS字甕が定着する北西関東と東海地方を水運で結節する役割をはたしたと考えられる。

荒川低地では、周囲の台地上の集落も継続するが、低地部への進出が顕著であり、堅穴建物280軒、水晶などの玉造工房、水路跡や堰や検出した埼玉県東松山市反町遺跡が代表例である〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012〕。一帯ではほかに中耕遺跡、富田後遺跡、下田町遺跡などが知られる。

榛名山東南麓では、扇状地端部から離れた井野川下流などの低湿地には、弥生集団は進出していなかったが、古墳前期になるとここにも大規模な遺跡が数多く出現している。玉村町上之手八王子

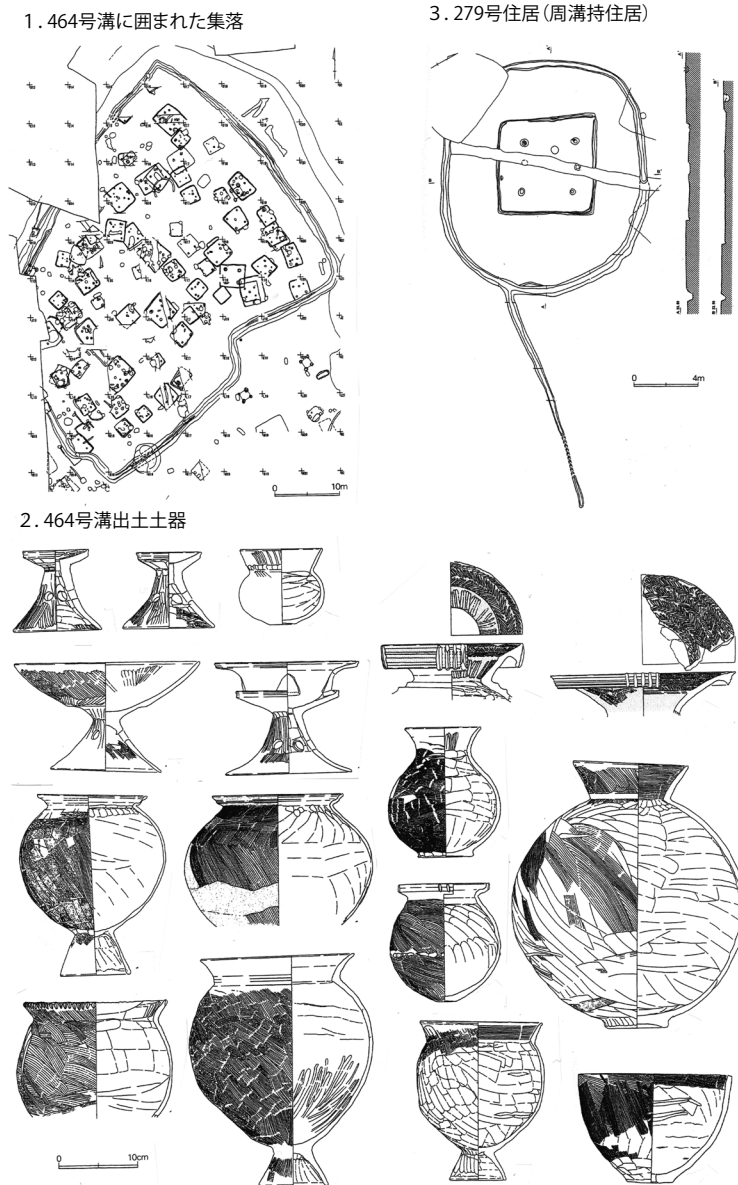


図9 妻沼低地の古墳前期集落（北島遺跡）  
[埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005]

利根川以東の群馬県東部地域もまた弥生後期集団がほとんど存在していない地域であったが、古墳前期には利根川北岸の低湿地（伊勢崎市・太田市地域）に大規模な遺跡が林立するようになる。大泉町御正作遺跡，太田市石田川遺跡，同市中溝深町遺跡，伊勢崎市三和工業団地遺跡，同市波志江遺跡などが代表的である。波志江遺跡では，S字甕の製作にかかる粘土採掘遺構が検出されている。

こうした新しい動態のなかで，在来弥生系土器は急速に変容し，消失していった。ところが，この中で独自の動きをするのが赤城山南麓地域である。同地域には，弥生後期に集団が不在であったにもかかわらず，古墳前期になってから樽式系・吉ヶ谷式系などの在来弥生系集団が出現する。古

遺跡や砂町遺跡，下郷遺跡，高崎市熊野前遺跡などが代表例として挙げられる。上之手八王子遺跡では，浅い竪穴建物の外周に排水溝を巡らした低地性の住居（周溝持建物）が営まれる。こうした住居は，弥生後期末から古墳前期にかけて，荒川低地を中心にして妻沼低地・東京低地・榛名山東南麓低湿地に広く出現し（図9），低地に適合した住居形式が集団と共に移入されたとみられる。これを集成した福田聖によれば，東海東部と北陸加賀地域に事例が集中することから，その地が起源地として推定されている[福田 2017]。北西関東には北陸系土器（主として北陸北東部系）も移入しており，反町遺跡などにみられる玉造り技術者の故地としても想定されているが，総量としては東海系にははるかに及ばない。北西関東の周溝持住居の起源は，この地域に広く展開する東海東部系土器（集団）との関係が想定される。

墳時代前期の社会変動のなかで、ながらく空閑地となっていた赤城山麓に在来系の人々が移住したことが明らかである。当地域は、山麓傾斜地であり、東海系集団の低湿地開発ソフトウェアとは無縁の地である。したがって、外来集団との関係において再編を迫られた在来の樽・吉ヶ谷集団が、固有の農業技術が活用できる未開地に移動したと考えられる〔若狭 1990〕。古墳前期の地域開発にあたっては、低湿地、山麓地など、開発経営技術の特性に応じた集団再編が進行したのである。

#### (4) 古墳前期の集団系譜

このように、弥生後期末から古墳前期の社会変化は、一度耕地として放棄された低湿地、あるいはそれまで開発が成されていなかった低湿地への集団進出に特徴づけられる。比企丘陵に展開していた吉ヶ谷集団と、大宮台地・武蔵野台地に展開していた弥生町集団の再編・流動化と共に、周溝持住居や東海系木製農具といった生活様式の移入から、新たな東海集団の移動が発生したと考えられる。

その展開に関しては、柳沼賢治が静岡県東部の大廓式大型壺（口縁内部に突帯を巡らす特徴的な大型壺）の分布から明らかにしたように〔柳沼 2013〕、駿河湾—伊豆半島—相模湾—三浦半島—東京湾—荒川流域と遡上して北武蔵や上毛野へ至る水上交通を主軸としたルート、あるいは東京湾—上総—香取海—常陸那珂地域—磐城—仙台湾と結ばれる同じく舟運を軸としたルートが復元できよう（図10）。大廓式壺の口縁部内面の突帯は、内容物のこぼれ落ちを防ぐストッパーと考えられ、その内容物である東海東部地域の産物が好まれて広域流通したと推測される。北條芳隆は東海東部産のブランド稲粳の流通を予察する〔北條 2017〕が、関東の低湿地に進出する集団が新開地において栽培する稲は、その性質を熟知した故地の産地米が適していると考えられ、説得力をもつ仮説であるといえる。

これまで、関東の古墳前期の移入者は東海西部系とされがち〔赤塚 1996〕であったが、パレス壺・ひさご壺+S字甕+東海型高坏・器台を基本装備とする伊勢湾岸の東海西部系土器が比較的純粋な組成（図9）として見られるのは榛名山東南麓域や妻沼低地とその周辺程度である。しかしそこでも東海東部系、弥生町系、北陸系、山陰系の土器が組成している。荒川低地や下毛野南部では、複合口縁で帯縄文装飾を持つ弥生町系の加飾壺、胴下半が屈曲する東海東部系壺、単口縁刷毛整形台付甕、東海型高坏・器台が基本セットで、これに下総系の平底甕や北陸系土器が加わる。

以上のように、東海西部集団と共に東海東部集団も北西関東の新時代の展開に重要な役割を果たしたことが推測される。なお、4世紀に入ると榛名山東南麓部を中核とした地域において、葬送儀礼で「伊勢型二重口縁壺」が用いられる。この壺は、伊勢地域の初期古墳やオオヤマト古墳群の東殿塚古墳（奈良県天理市）において葬送に用いられており、この地の移入集団が伊勢地方との関係を保持したことを示している〔田口 1981〕。

#### (5) 古墳の動向

弥生後期の北西関東には、方形周溝墓ならびに中部高地系の円形墓・礫床墓が展開した。なかには螺旋状鉄釧や銅釧、鉄剣、玉類の副葬品を検出する例があるが、これらの威信財を集中的に副葬したり、突出した規模をもつ墓は不明確である。また、首長の存在を示唆する居住遺構・祭祀遺構



も明確ではない。墳長 50m を超える規模、高い盛土、可視性の高い独立的な立地、威信財の副葬といった条件を備える首長墓の成立は、前方後方墳の登場を待つことになる。

そうした条件のうち幾つかを備えた、首長墓といえる前方後方墳のうち西暦 300 年前後の初出例は、荒川中流域の埼玉県吉見町三ノ耕地 1 号墳 (49 m)・山の根古墳 (55 m)、群馬県西部の高崎市元島名將軍塚古墳 (95 m)、前橋八幡山古墳 (130 m) などを挙げることができる。このほか 40 m 級の前方後方形周溝墓は枚挙に暇がない。群馬県東部から栃木県西端部では、やや遅れるが、足利市藤本観音山古墳 (117 m)、藤岡町山王寺大榎塚古墳 (95 m)、太田市寺山古墳 (60 m) などの大型前方後方墳が登場する (図 11)。

このように、榛名山東南麓から利根川中流域北岸の上毛野一帯に 100 m 級の大型墓が成立するのであり、弥生町系集団が依拠した大宮台地や武蔵野台地には突出した大型前方後方墳はほとんど知られていない。このことは弥生末期に低湿地に新たに移入した東海集団の末裔が大型前方後方墳の築造者・被葬者であったことを示している。

## ⑤……………移入集団の故地と環境変動

### (1) 前方後方墳の動向

それでは北西関東に移入した集団の本貫地の動向はどうであろうか。これまで述べてきたように、弥生後期前半から古墳前期まで、関東へ移入する土器の系譜には東海西部系と東海東部系の双方がみられた。特に、弥生後期終末から古墳前期には、住居形式や木器型式、墳墓形式などを一体化したシステム移動がみられる。

前方後方形墳墓の最古のものは弥生終末期の近江、尾張、駿河に存在する〔中井・鈴木 2012〕ので、関東に展開する前方後方墳の起源地は東海地方に求められる。東日本における前方後方墳の築造動向は、「前方後円墳集成」1 期段階 (3 世紀後半) では墳長 60 m 代を最大とするが、2 期 (4 世紀初頭) には 100 m 級が出現し、3 期 (4 世紀前半～中頃) には各地で前方後円墳に置き換わり、

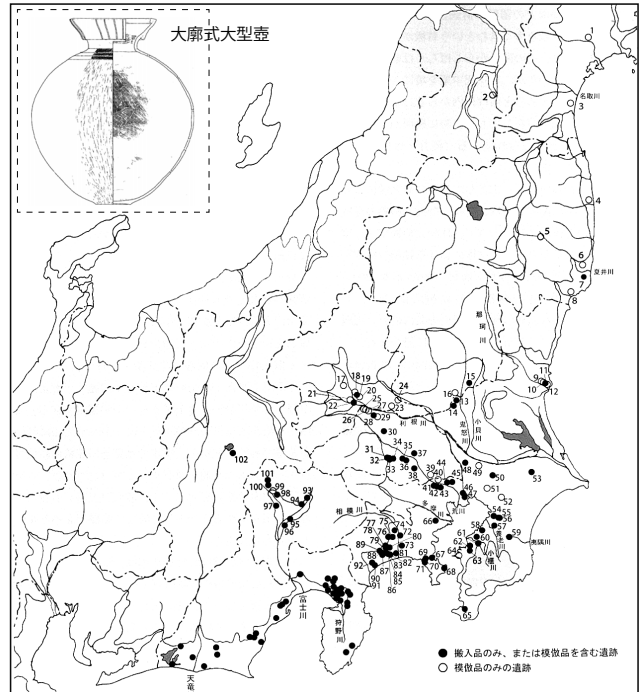


図 10 大廓式壺の動きと交流ルート  
〔柳沼 2013 を一部改変〕

時期	伊勢	美濃	尾張	三河	遠江	駿河	上野	下野・那須	武蔵	相模	上総	常陸
0		■東町田 10号17	■西上免 40 ■廻間25			■丸ヶ谷 戸26					神門5号 42 ■高部30 号34	
1						■高尾山 60 神明山69		■駒形大 塚64	(宝来山)	秋葉山3 号50		
2		■高塚60	■東之宮 80	■二子69			■將軍塚 95 ■前橋八 幡山130 ■寺山60				■道祖神 裏56 今富塚山 110	星神社90
3	■向山71	花岡山60 親ヶ谷85 円満寺山 60 矢道長塚 90 龜山98	■高御堂 65 二ツ寺神 明社80	姫小川69 八幡66		■午王堂 山78 ■浅間 100 谷津山 114 向山16号 70	■藤本観 音山117 前橋天神 山129 下郷天神 塚102 朝子塚 123	■那須八 幡塚68 ■下侍塚 84 ■大樹塚 96	■鷲山60 野本將軍 塚120 (宝来山) 100 龜甲山 104	長柄桜山 2号80	浅間神社 100 姉崎天神 山130 飯籠山 102	■勅使塚 64 梵天山 160 葦間山 141 長辺寺山 120
4	池の谷90 能褒野王 塚90	■粉糠山 100 南山96 長塚72 坊の塚120	青塚123 白鳥塚109 白山神社 100 八高70 高田87	甲山120 正法寺91 和志山60	銚子塚 112 松林山 107 庚申塚83 瓢塚63 ○兜塚80	三池平67 東坂60	浅間山 172 大鶴巻 123 八幡山84	■上侍塚 114	白山87 観音松90 芝丸山 110	長柄桜山 1号90	釈迦山93 白山神社 89 油殿93 柏熊杓子 塚72	日下ヶ塚 106 木原愛宕 塚100

図11 東海から関東地方の前期主要古墳 [中井・鈴木 2011, 若狭 2017 より作成]

無印：前方後円墳 ■：前方後方墳 ○：円墳  
駿河以西は60m以上を表示，関東は80mを基準としつつ，必要な事例を加入した  
(0期のみ小型も表示)。

4期(4世紀後半)には終焉する。前方後方墳が3期まで築造されるのは，美濃・尾張・駿河・上毛野・下毛野・那須・北武蔵であり，その他の旧国域では早めに前方後円墳に転換する。このことから，関東では上毛野・北武蔵の北西関東と下毛野・那須の北関東地域に，東海地方の墓制と葬送観念が長く定着したと説明することができる。

注目されるのは，前方後方墳の規模である。本貫地の東海地方では，墳長80mを越える事例は美濃の北山古墳・粉糠山古墳，尾張の東之宮古墳，駿河の浅間古墳の4基に過ぎず，最大は浅間古墳・粉糠山古墳の100mである。これに対して，関東地方では上毛野の前橋八幡山古墳130mを筆頭に6基を数える(図11)。

集団移入先の新興地において，首長の強い求心力や集団結集の心理作用が墳墓をより大きくした可能性はあるが，古墳規模は動員力に比例すると考えてよければ，関東地方の古墳前期に人口集中が発生したことは明らかであるといえる。東海地方から関東に移入した集団は相当の規模であり，低湿地経営の成功による経済成長と高い動員力を培っていたと考えるべきであろう。

## (2) 東海地方の集落動向

では，本貫地における集落の動態はどうであろうか。東海西部伊勢湾岸地域の弥生後期～古墳初頭における集落動態の検討を進める石井智大の研究を参照したい。まず，2011年の伊勢地域の検討結果では，①弥生後期初頭に集落が減少し，後期前半が低調であること，②弥生終末期後

半（廻間Ⅱ式期）に集落が希薄であること、を示し、この2時期を集落形成の画期としている〔石井 2011〕。

続いて東海西部全域を対象とした2016年の検討〔石井 2016〕によれば、尾張の日光川流域、伊勢の雲出川流域、尾張の朝日遺跡、美濃の荒尾南遺跡、三河の鹿乗川遺跡群など東海西部各地のケーススタディにおいて、いずれも①弥生中期後半の集落が後期前半には消滅・縮小すると同時に、小規模集落に分散化して丘陵・台地上に移動する現象を示し、ここが大きな画期であったことを指摘している。加えて、②後期後半から終末期には集落形成が沖積低地へと向かい大規模化した。前期初頭には散在化して規模を減じ、古墳時代前期末になると大幅な集落の縮小がみられるとし、ここにも画期を設定する。なかでも「古墳時代初頭を境に、古墳時代前期を通じて集落は散在化傾向を示すと考えられる。大規模な遺跡はほとんど見出すことができない」との記述は注目される。

また、首長墓に関しては「伊勢湾沿岸地域全体にわたって古墳の築造が活発化するの、前期中葉以降」と述べ、古墳時代初期の大型首長墓の不在を明示している。これは、先に図12にでも示したところである。こうした現象の背景として石井は、古墳時代の物流機構の整備によって集落の機能分化が進み、大集落の役割が低下したことによって集落の分散が進んだと経済的側面から説明する〔石井 2016〕。

石井の解釈は、古墳時代成立期の社会再編に関して新しい視点を提供しているが、一方で石井の研究を総括すると、東海西部では、

- ①弥生後期前半における集落の減少、
- ②伊勢における後期末（廻間Ⅱ式期）の集落の希薄化、
- ③後期末における低湿地進出と集約化、
- ④古墳前期における集落の分散化と小規模化、
- ⑤古墳築造が活発化するの古墳前期中葉以降、

とまとめることができる。この考察は、同じく濃尾平野の集落動向を分析した宮腰健司や石黒立人の指摘とも整合する〔宮腰 2011, 石黒 2011〕。

この結果と、既に指摘してきた関東の集落・墳墓動向に関しては、次のように連動的であるといえる。

- ①東海西部の弥生後期前半の集落減少⇒南関東における東海系集団移入、
- ②伊勢における後期終末（廻間Ⅱ式期）の集落希薄化⇒北西関東における東海西部系集団移入、
- ③東海西部の古墳前期初頭における低地進出と集落分散化⇒関東における低地への大規模な集団進出
- ④東海西部における古墳前期前半における古墳築造の低調⇒関東における大型前方後方墳の存在。

## ⑥……………弥生～古墳時代の社会再編と環境変動

### （1）弥生後期初頭の集落立地の変化と多雨化の相関

北西関東における弥生中期末の拠点集落の一斉解体と後期前半における低湿地からの離脱は、およそ西暦1世紀前後の事象である。このころ、一帯の低湿地の利用に障害が起こったと考えられる。先述のように榛名山東南麓のA群エリアでは湧水の過剰による排水障害が想定される。

B群エリアの相馬ヶ原扇状地端部に位置する高崎市並榎北遺跡では中期末の水田遺構が洪水にともなう砂層で埋没していた〔高崎市教育委員会 1996〕。その一帯では水田遺構が重層して営まれており、弥生水田（洪水で埋没）⇒古墳前期水田（浅間C軽石で埋没）⇒古墳中期水田（榛名FA火砕流で埋没）⇒古墳後期水田（榛名FP泥流で埋没）⇒平安水田（浅間B軽石で埋没）と重なっている。

降下火山テフラによる被覆と噴火後の天然ダム決壊に伴う2次洪水の被災が連鎖しているものの、噴火と連動しない通常の洪水被害は弥生中期末のみにみられ、その時期に水利の異常があったことが明らかである。また、妻沼低地の北島遺跡でも中期後半の水田遺構を砂層が覆い、一部集落域にまで洪水が及んだ状態が観察された。

中期末から後期初頭にかけの拠点集落の途絶や遺跡減少などの社会再編は、北西関東だけではなく東京湾沿岸地域ではさらに顕著であり、宮ノ台期から久ヶ原期に集落が激減することは前述のとおりである。これに関して、グリーンランドの氷床コアの分析値や後漢書の飢饉の記事などを合わせて、弥生後期に相当する時期の寒冷化を指摘し、関東弥生社会の変動を指摘した小橋健司の意見がある〔小橋 2015〕。

東海地方でも、石井智大の①の所見のように中期末～後期初頭に集落の減少が起きており、東日本最大の弥生集落である朝日遺跡においても洪水被害による集落の改変が報告されている。朝日遺跡は、自然流路（谷A）を挟んで南北に隣接した2つの集落域と墓域から成るが、このうち北集落では中期末（高蔵式期）に、谷Aと集落南側が洪水砂（朝日T層）で埋没している。洪水は谷とムラの間にあった逆茂木・乱杭地帯を覆っている状況であった。朝日遺跡では、これまでこの逆茂木・乱杭を敵の侵入を妨げる防御遺構と解釈し、弥生時代の戦いの象徴的なイメージを形成してきた。しかし、赤塚次郎はその性格を見直し、洪水に備えた水害対策の施設であったとしている〔赤塚 2009〕。この歴史観の変更は、大いに注意される点である。

続く後期前半（山中式期）には、集落を洪水から守るために、南集落の南側に谷Bを開削し、谷Aの水を人工的に迂回させたが、朝日遺跡はこの時期以降、縮小していくことになる。これは一例に過ぎないが、濃尾平野と名古屋台地では朝日遺跡ばかりでなく他の遺跡でも中期末の洪水被害が確認されており〔石黒 2011〕、多くの伝統集落が解体するのは前述のとおりである。

いずれにしても、関東から東海地方の広域に及ぶ社会的枠組みの転換は、一過性ではない全国的な環境イベントに突き動かされた可能性が高い。このとき、洪水の発生や低湿地の放棄という考古学的に判明してきた事実は、雨量の増大や湧水量の増加に原因を求めると理解しやすい。

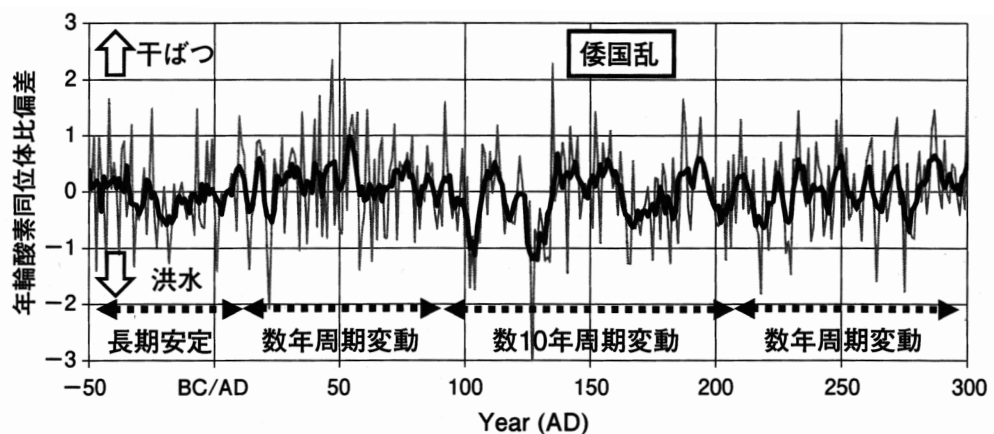
この時重要なのが、中塚武によるヒノキの年輪セルロースの酸素同位体比を計測した「酸素同位体比年輪年代法」による1年単位での降雨量の推計である（図12）。中塚は、多雨期が一定周期で循環することを指摘し、とくに弥生後期の西暦1世紀には数年周期で変動が始まり、2世紀には数十年周期で多雨期と乾燥期が循環し、3世紀になると収まっていく解析したうえで、この状況を、倭国大乱や卑弥呼の登場の背景として説明する〔中塚 2012・2015〕。

温暖で雨量が安定的であった弥生中期において、順当に妻沼低地や榛名山東南麓に定着してきた農耕集団は、後期前半〔1世紀〕の多雨期による水系の変動、湧水の増大による排水系の破綻、深田への変貌、耕地や集落域の冠水などによって、農業経営を放棄せざるを得なくなった。そのために、後期中葉〔2世紀〕には扇状地上や台地上へと集落展開し、かつ小規模集落の併存という集団の分散へとシステムを転換した可能性が指摘できる。

後期における集団の分散の理由として柿沼幹夫は、面的な低湿地経営から台地縁辺の谷津田の経営に変わり、小規模水田の地力低下とその再生のために、農地・集落も定期的に移動して循環的な社会サイクルを形成したためとする〔柿沼 2018〕。集落の不安定さは、いきおい集団の流動化を促したと推定できる。そして3世紀には再び安定してきた広大な低湿地に新たなソフトウェアを携えた東海集団が、流動化していた在来集団を再編する形で組織的に移入したと考えられる。

## (2) 環境変動がもたらした集団移動と古墳時代への動き

上述のように、集落の盛衰と集団の移動現象は、多雨化にともなう低湿地利用の困難化を一因とした可能性があり、東海地方から関東全域にかけて連動した歴史的現象といえそうである。東海系集団の東日本への移動に関しては、邪馬台国と狗奴国の抗争の戦後対応として説明する説が提示されてきた〔赤塚 1996〕。このような政治的な理解はいまも仮説として重要であるが、そうした社会



中部・近畿地方で得られた BC1 ～ AD3 世紀のヒノキ年輪セルロースの酸素同位体比の変動（年輪セルロース酸素同位体比は、ヒノキに特有の樹齢効果を取り除くため、測定固体毎に長期トレンドからの各年の値の偏差をまず計算し、その偏差を年毎に測定個体間で平均して表示している。灰色と黒色の実線は、それぞれ年単位と5年移動平均の値を示す。）

図 12 中塚武によるヒノキ年輪の酸素同位体比の変動図〔中塚 2015〕

的緊張の根本的な原因として、環境変動による既存経済システムの破綻、集団の流動化、社会不安の増大を重視するべきであろう。

なお近畿地方でも、弥生中期から後期にかけて洪水被害が頻発し、それに伴う集落移動が社会再編を突き動かしたとの論調が存在していた〔安田 1990〕。しかし、若林正人によれば、旧河内湖南岸地域や淀川沿岸地域では、弥生中期末の洪水被害はあっても集落の途絶は見られず、弥生後期末から漸進的に台地上の開発にシフトし、5世紀に至って集落展開の大画期が存在すると考察されて

いる〔若林 2016〕。

このことは、弥生中期末に地域社会構造が一度崩壊した東海地方から関東地方と、崩壊に至らなかった畿内との間に、環境変動への社会的対応力の差が存在したことを示唆する。水利経営にかかるシステムやソフトウェアが畿内の弥生社会において成熟していた可能性があり、環境変動に翻弄された東方の弥生社会との質的な差があったことを推定させる。そのシステムの解明は、なぜ畿内に王権が成立したかを考える際に、重要な視点を提供するものである。

### (3) 広域水利事業と首長の存在意義

中塚が指摘する長い降雨期が収束しつつあったなかで、弥生時代末から古墳時代前期初頭の北西関東においては、広大な低湿地が再び土地利用可能な状況に回復していった。利根川中流に在地弥生集団が利用しない手付かずの土地が存在するという情報が西にもたらされ、耕地が不安定化していた東海集団の一部が目的的に移入することになったと想像される。上毛野地域に100 m級の大形前方後方墳がいち早く成立したのは、首長によって率いられた一定規模の集団が組織的に移入したからに他ならないだろう。上毛野の井野川流域では、前方後方形墳墓の規模に90 m・40 m・20 mという階層化がみられることも、移入集団の厚みと秩序の存在を考慮させる。

一方、早くに東海東部集団が移入して在地展開していた大宮台地一帯に、大形前方後方墳が成立しないのは、弥生町系集団のなかで首長層の確立が遅れていたと説明せざるを得ない。これは榛名山麓の樽集団においても同じである。分節化・流動化していた在来集団のなかに首長を生み出す社会的必要性が低かったのであり、逆に言えば後発して東海地方からの移入してきた集団が、組織的に成熟していたということになるだろう。

榛名山東南麓の玉村町の砂町遺跡では、3世紀後半に方格状に溝を掘って低湿地の排水を促し、その後幅10 m・深さ1.5 mの規模をもつ長大な水路を構築している〔玉村町教育委員会 2007〕。規模・構造が類似した大水路は前橋市徳丸仲田遺跡ほか複数の遺跡で検出されている。これによって、榛名山東南麓の利根沿西岸部の広大な低湿地は初めて水田化が達成されたのである。

この水路は、水源地から用水を取得する以上に、低湿地の滞留水を排水する系統として重要であったと考えられる。長大な水路建設によって低湿地を耕地として利活用する事業は、長年低地経営から離脱し、かつ首長層が未発達であった在来の弥生系集団には困難であった。濃尾平野などの広大な低湿地経営のノウハウをもち、強力な首長に率いられた集団にこそ推進できる事業だったのである。

## おわりに

利根川の上・中流域にあたる北西関東では、弥生時代中期中葉から中期後半にかけて、利根川南岸の妻沼低地に大規模な農耕集落が定着したが、弥生時代後期前半に一斉に解体し、集団は台地上で分散的に暮らすようになる。その傾向は、利根川上流の榛名山東南麓地域においてもみることができた。これは、1～2世紀における多雨化を伴った環境変動による、低湿地環境の悪化にあったと推定される。集落は台地上に分散し、谷水田と畑作による移動経営を余儀なくされ、首長層の成長をもたらさなかった。

しかし、弥生終末から古墳前期になると遺跡は上記の低湿地に再び進出し、大規模化するとともに、従前には経営が叶わなかった利根川北岸や荒川低地・東京低地にも新出することとなった。これには、多雨化の収束による低湿地環境の改善があったと推定される。この時期に北西関東の低地に進出したのは、環境変動を一因として流動化した東海西部、東海東部集団であり、そのソフトウェアが移入されることにより、大規模な水田化が進行していった。

大型の前方後方墳が、本貫地の東海地方より北西関東に多いのは、集団移住の大規模さと首長に率いられた階層化された集団による労働集約ならびに新開地における集団結集の実態を示すと考えられる。弥生時代末には、ほかにも北陸集団の動き、房総集団の東北への移動〔比田井 2004〕が知られている。こうした広域的な社会再編の理由を、国と国との戦争に求める学説も棄却しがたいが、環境変動による土地利用の激変と集団の流動化が社会的緊張と社会再編の原因であった可能性を考えるべきであろう。

## 註

(1)——前中西遺跡においては詳細な土器編年が検討され、北島式に後続する在地様式の提唱も試みられている〔松田 2013・宅間 2013〕が、本稿では分布論検討のために大枠での編年観を提示するに留める。

## 参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 2009『朝日遺跡 8』
- 赤塚次郎 1996 「前方後方墳の定着 ―東海系文化の波及と葛藤」『考古学研究』43-2 考古学研究会
- 石井智大 2011 「伊勢湾西岸地域における弥生時代後期集落の様相」『伊勢湾岸の弥生後期社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト
- 石井智大 2016 「伊勢湾沿岸地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 石川日出志 1998 「弥生時代中期関東の4 地域併存」『駿台史学』102 駿台史学会
- 石川日出志 2007 「弥生時代中期後半の関東地方西部域」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 石黒立人 2011 「弥生後期の伊勢湾岸世界」『伊勢湾岸の後期弥生社会』
- 伊丹徹・大島慎一・立花 実 2002 「相模地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 柿沼幹夫 2008 「後期土器編年 一県北部・西部地域」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 柿沼幹夫 2018 「弥生時代後期の社会」『熊谷市史 通史編上巻』熊谷市
- 関東弥生文化研究会・埼玉弥生土器観会 2013 『シンポジウム熊谷市前中西遺跡を語る』
- 小橋健司 2015 「気候変動と房総の弥生社会」『列島東部における弥生後期の変革』六一書房
- 埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『小敷田遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2003 『北島遺跡Ⅵ』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012 『反町遺跡Ⅲ』
- 設楽博己 2008 『弥生再埋葬と社会』塙書房
- 高崎市教育委員会 1996 『並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡』
- 田口一郎 1981 『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 宅間清公 2013 「前中西式土器とその周辺」『シンポジウム熊谷市 前中西遺跡を語る』
- 立花 実 2005 「相模地方の後期弥生土器」『南関東の弥生土器』六一書房
- 玉村町教育委員会 2007 『砂町遺跡・尾柄町Ⅲ遺跡・中之坊遺跡』
- 中井正幸・鈴木一有 2011 「東海」『講座日本の考古学 7 古墳時代・上』青木書店
- 中塚 武 2012 「気候変動と歴史学」『環境の日本史 1』吉川弘文館
- 中塚 武 2015 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62-2 考古学研究

---

会

- 西川修一 2001 「南関東における古墳成立前夜の社会情勢」『日本歴史』638 吉川弘文館
- 福田 聖 2017 「関東地方における周溝持建物の展開」『研究紀要』31 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 比田井克仁 2004 「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』33 史館同人会
- 古屋紀之 2014 「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学会
- 北條芳隆 2017 「関東地方への前方後円（方）墳の波及を考える」『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山』六一書房
- 松田 哲 2013 「熊谷市前中西遺跡の調査」『シンポジウム熊谷市 前中西遺跡を語る』
- 宮腰健司 2011 「弥生時代後期集落の動向―濃尾平野・名古屋台地」『伊勢湾岸の後期弥生社会』
- 柳沼賢治 2013 「大廓式土器の広がり」『駿河における前期古墳の再検討』静岡県考古学会
- 安田喜憲 1990 『気候と文明の盛衰』朝倉書店
- 吉田 稔 2003 「北島式の提唱」『埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代―弥生時代の新展開―』埼玉考古別冊7 埼玉考古学会
- 若狭 徹 1989 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220 群馬県地域文化協議会
- 若狭 徹 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1 群馬土器観会
- 若狭 徹 2007 『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 若狭 徹 2017 『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
- 若狭 徹 2018 「古墳前期の地域開発と古墳の被葬者像」『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・東アジアシルクロード考古学研究所
- 若林正人 2016 「水害に関わる環境と初期農耕社会集落動態」『国立歴史民俗博物館研究報告』203

#### <付記>

本稿は2019年3月に提出したものであるが、刊行までに2年以上を経過した。このため、その後の研究動向が収録できていない。本論でも取り上げた中塚武をリーダーとする歴史学と環境変動の関係を追求したプロジェクトは、2020年から刊行された『気候変動から読み直す日本史』（臨川書店）全6巻として体系化された。そのうち第3巻には、本論にかかわるものとして樋上昇の論考「2019「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」『気候変動から読み直す日本史 3 先史・古代の気候と社会変化』臨川書店」が掲載されている。樋上は、尾張では寒冷多雨の環境変動によって弥生中期末から後期前半に集落が大きく再編され、集団が流動化し、移動したことによって、三河まで含めた土器文化の斉一化が進んだことを指摘している。同時に、この環境変動によって、駿河では農地の湿地田化が進行したことを水田遺構論と農具の形式変化から論証している。この東海地方の社会再編の波が、本稿でも指摘した関東地方への集団移動現象に連なると結論している。

この樋上論文の重要な成果を、本論の研究史に組み入れることができなかったが、本論の内容と共鳴しあうところが大きいことをここに明示しておきたい（2021年6月）。

（明治大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2020年12月11日受付、2021年2月9日審査終了）



---

## **Archaeological Site Dynamics and Environmental Changes in the Late Yayoi Period in the Northwestern Kanto Region**

WAKASA Toru

In the northwestern Kanto region, which is located in the upper reaches of the Tone River, large-scale agricultural settlements have developed in the lowlands along the Tone River since the middle of the middle Yayoi period. However, they were dismantled all at once in the former half of the late Yayoi period, and the group began to live in a decentralized manner on the plateau. This was probably due to the deterioration of the lowland environment by the heavy rainfall which occurred at the end of the middle Yayoi period. It is thought that the growth of the chiefs was delayed because of the dispersion of the group and the disruption of large-scale paddy field management.

After that, at the end of the latter half of the late Yayoi period, the settlements re-entered the lowlands and began to manage vast paddy fields. There was presumably an improvement of the environment due to the convergence of heavy rainfall. During this period, groups from Tokai regions which had been fluidized owing to the previous environmental changes newly immigrated to the lowlands, and by introducing the agricultural “software” cultivated in the lowlands of the Nobi Plain, paddy fields were widely extended in the Tone River lowlands.

In the early Kofun period, several double-square burial mounds (zenpo-koho-fun) were built as the tombs of the chiefs. The double square burial mounds in this area originated from the Tokai region, but they are larger in the northwestern Kanto than their prototypes in Tokai. This indicates that the size of the migration was large and that the groups were organized by powerful chiefs. At the end of the Yayoi period, groups from the Hokuriku and Boso areas also moved northward. It is thought that such wide-area social reorganization was caused by drastic changes in land use due to environmental changes and the fluidization of groups, which promoted the formation of a new system in the Kofun period.

Key words: Increased rainfall, Reorganization of settlements, Mass migration, Lowland development, Double-square mound